

2019全日本ARDF競技大会(第30回大会) 北海道で開催される



令和元年10月5日(札幌市), 6日(千歳市)

はじめに

年号の改元により、令和初の「全日本ARDF競技大会」が、昨年10月5日(土)札幌市、6日(日)千歳市の両会場で開催されました。JARL主催となった第1回目の全国大会が1989年に開催されましたが、この年には「昭和」から「平成」に改元があり、本大会の第30回開催年にも「平成」から「令和」に改元になりました。このメモリアルな大会を北海道の地で開催できたことは大変光栄なことと感じています。

本大会は本来、2018年に開催している大会ですが、一昨年9月5日の台風21号及び翌日6日の北海道胆振東部地震による競技地域の閉鎖に伴い、止む無く取り止めとなった経緯がありました。再度北海道開催を願う全国のARDF愛好者の方々に背中を押され、北海道の実行委員会もリベンジを果たそうと士気は高まりました。

しかし、自然界の仕打ちは非情なもので、雪解けから準備を進めていた最中、競技地域としていた江別市内の公園内に昨年6月中旬、何と「78年ぶり」にヒグマが現れてしまったのです。北海道内でもここだけはヒグマの恐れがないと公園管理者からお墨付きをもらっていたにも関わらず、このヒグマは2か月以上も広範囲に移動しつつ、一向に山に立ち去る気配もないことから実行委員会として今度は急遽、競技会場の変更を迫られることになってしまいました。

大会本部がある千歳市からの距離も考慮して1時間以内に移動できる競技地域を探し、各方面から情報収集した結果、候補地になったのが札幌市清田区の「白旗山都市環境林」でした。少々山岳地帯ではあるものの数km四方の広範囲でおこなう「クラシック競技」に

は打ってつけのように思われました。また、もう一方の競技は春先から千歳市「青葉公園」で1km四方程度の公園内でスピーディーにおこなわれる「スプリント競技」を考えていたのですが、北海道では「スプリント競技」の選手経験者すら居ない状況で、まずは競技に関する情報収集することから始めました。

競技地域の変更決定から開催まで3か月もない状態で、実行委員は休日をすべて現地調査に出向き、ルールについても勉強しました。全国のベテラン選手からはTX、アンテナ等の取り扱い、SIシステムの運用要領そして、大会運営のノウハウまで親切丁寧にアドバイスをいただきました。そのおかげで何とか開催に間に合い、その日を迎えることができました。

第1日目【クラシック競技(144MHz帯)】

本大会の大会本部は、選手等の移動等も考慮して「千歳市東雲会館」に置き、ここで選手受付、開閉会式等をおこないましたが、少々狭かったようで選手の方々には大変不便をお掛けしてしまいました。受付業務では、役員が少なかったために選手の同伴者や応援に来られた方々にもご協力していただきました。さすがに手慣れたもので、更に顔見知りも多く2年振りの再会に挨拶も兼ねた受付は順調に進みました。

開会式では、JH8HLU 正村大会実行委員長の開会宣言の後、JG1KTC高尾大会会長の挨拶に続き、JAIHQG有坂JARD顧問からは来賓のお言葉をいただきました。



更に2017年優勝の関東地方本部からのJAIA杯の返還、選手宣誓と続けました。選手宣誓は、本大会の30回目にちなんで年齢30歳のJG1NFC足達優人さんが選ばれ、声高らかに堂々と宣誓を務めていました。その後、JE8JOK竹内審判長から競技説明と諸注意事項があり、記念撮影後少し早い昼食となりました。

競技地域までは高速道を利用して45分程のバス移動となりましたが、午前中の雨も上がり、午後1時、第1組がスタートし最終10組計91名の選手たちが競技に臨みました。競技の途中、雨が落ちる時間帯もありましたが、大きく崩れるようなことはありませんでした。

競技地域の「白旗山都市環境林」には、中央付近に標高321.5mの「白旗山」がそびえ、その周囲には複雑な林道等があります。更に家屋等の大きな目標物は皆無の森林地帯になっています。広さ約1,000haのうち、諸事情により本大会では1/4を競技エリア外としました。選手たちは起伏の激しい地形からの反射波に惑わされ、更に複雑に入り組んだ林道や探索路に思いもよらず悪戦苦闘したようでした。

競技時間は2時間でしたが、第1組目がスタートして1時間30分経過しても誰もゴールしてきません。そして競技時間が終了する午後4時、TX停波時刻になっても23名がゴールしていません。



既に携帯等で途中棄権により回収を希望する選手から連絡が入り、スタート地点方向から計4名を回収し、審判長が選手の通り道として可能性の高い場所に移動すると、周辺に9名の選手を発見し2台の車でゴールへ回収しました。その他自力の帰還者も含め、全員が無事にゴールしたことは言うまでもありません。それにしても、56%の失格者を出すようなコースセッティングが良いものだったのか悪いものだったのか、大会運営の経験不足によりその基準も分かりませんでした。しかし、可能であれば、あの競技地域にもう一度、挑戦してみたいと言ういくつかの声を聞いたのも確かでした。

第2日目【スプリント競技】

2日目は審判長の競技説明で始まり、徒歩で15分程



度の競技地域に移動しました。当日は、無風の晴天で競技開始時気温15度の最高の天候に恵まれ、エントリーした90名の選手たちは秋晴れの下、前日のクラシック競技のうっぶん晴らしをするかのように、気持ちが高まっているように感じられました。

北海道で初の「スプリント競技」でしたが、早速トラブル発生で審判長が現場に走り対応し予定どおりスタートとなりました。更に経験不足によるトラブルがスタート地区でもありましたが無事にスタートすることができました。競技時間60分とし、第1ループと第2ループのTXを混在させる特異なセッティングでしたが、意外にも予想通りのタイムで選手たちが次々とゴールして来る様は、さすがに世界大会を目指しているアスリート達と感心しました。



スプリント競技には「スペクテーター走行コース」があります。見学者、応援者等のための見せ場となるコースですが、本大会ではこのコースを公園のメインストリートにセッティングしました。「選手だけの競技」から「見せる競技」として意義に沿ったセッティングをしたつもりでした。



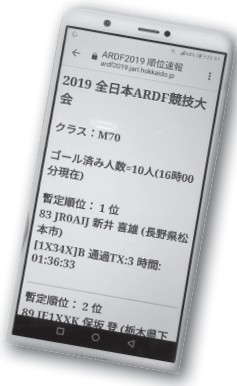
初物尽くしの北海道大会

北海道での全国大会開催は、1995年江別市と2002年砂川市の2回だけです。17年振りの北海道での開催でしたが、その間全国大会に選手としての出場も10年程前が最後となり、それからは細々と「北海道地方本部大会」を開催しているだけの状態でした。よって、本大会には初めて北海道上陸をしたものがいくつもありました。

まずは、「3.5MHz帯のTX電波」です。2017年のクラシック競技で使用する予定の「釣り竿アンテナ」も本大会の「地上設置型ロッドアンテナ」も初めて見るものでした。また、3.5MHz帯の受信機は北海道内に数台あるだけで、どんな特性があるのかも試したこともありません。

第2に「SIシステム」です。SIカードは選手時代に使用したことがあります。システム全体を運用する

ことは初めてでした。ところが実行委員の一人がSIステーションの読み込んだデータから成績集計、記録証印刷、表彰状印刷、速報表示をするプログラムを北海道オリジナルで作ってしまったのです。競技地域と大会本部とが離れているので、SIデータをモバイルルーターによりサーバーにUPすることにより、そのデータを大会本部の速報表示と併せて、個人端末等でも見ることができるシステムも初めて運用してみました。初日の白旗山では携帯の圏外地点が多く、帰りのバスの中での楽しみとなったようですが、2日目のスプリント競技ではゴール後に早速、URLにアクセスしてリアルタイムの速報を確認していたようでした。その数は158端末(人)から両日合算で延べ3,000回以上のアクセスがありました。遠くのご家族、友人にも連絡したようで、PCやタブレットからのアクセスもあったようです。このように遠くに居てもリアルタイムで速報を確認でき、大会の一端を共有できることは楽しさ倍増と思われます。学生の引率者においては学生全員がゴールしたかなどの確認にも利用できたという声もありました。



第3に、オリエンテーリング地図用製作ソフト「O-CAD」です。これは、JE8JOK竹内審判長が自ら自学研鑽して競技用地図の製作に取り掛かりました。本大会競技地域の「白旗山都市環境林」は等高線が細かく複雑だったので大変苦労したとのことでした。

第4に、先に述べた「スプリント競技」自体です。全日本大会としては、初の正式競技として開催しました。見たことも無い競技には大いに不安がありましたが、運良く5月に新潟県支部のスプリント競技大会を視察研修する機会があり、それを参考にビデオや審判講習会を開催し事前にレクチャーしてあったおかげで、初めてとしては概ねスムーズに開催できたように思われます。

なお、当然「スタートチャイマー」なる物も北海道初

上陸の品物でした。

表彰式

表彰式は、前日の「クラシック競技」も含めて両競技の表彰式を実施しなければならず、何とか時間短縮をしつつクラス別の記念写真を撮りたいと欲張って計画していましたが、思い通りにはいきませんでした。千歳空港に向かう時刻が迫っている方々にはご心配をお掛けしてしまいました。

表彰は各競技部門ごとにおこなわれ、JG1KTC高尾大会会長から被表彰者一人一人に表彰状とメダルが授与され、記念写真も良い思い出になったことでしょう。

初日におこなわれた144MHz帯団体賞の地方本部対抗表彰(JAIA杯)は「関東地方本部」が4連覇を成し遂げました。

中学校及び高等学校対抗表彰(JARD杯)はJARD有坂顧問から各優勝校に対し表彰状が、JARD伊藤管理部長からトロフィーがそれぞれ授与され、カメラのシャッターと拍手で称えられました。

おわりに

17年ぶりとなる北海道開催は自然災害に見舞われ、ヒグマには競技会場を奪われるなど2年越しとなってしまいましたが、トラブル・事故等も無く無事に閉会となりました。初物尽くしの不慣れな運営は、綱渡り状態で「奇跡」としか言いようがありません。少数精鋭の実行委員会の一致団結そして選手の皆さんのご支援とご協力があったのことに感謝しています。

老若男女問わず楽しめるラジオスポーツの「ARDF競技」。正にそのとおりで、ベテランの選手は基より中・高校生の皆さんのハツラツと走る姿にも感動させられました。

最後になりますが、長い間親身になってご指導、ご教示いただきました全国各地のOM諸氏と遠路、大会にご参加いただいた選手の皆様方にこの場をお借りして心から感謝申し上げます。

なお、本大会の様子は本大会ホームページで公開していますので、是非ご覧になっていただきたいと思えます。

(大会事務局長：澤見仁志 JG8FBG)

<http://ardf2019.jarl.hokkaido.jp>

